

Title	キケロー『ブルトゥス』試訳 (IV) : §61～§94
Sub Title	Cicero, Brutus 61-94 a Japanese translation with notes
Author	小池, 和子(Koike, Wako)
Publisher	慶應義塾大学言語文化研究所
Publication year	2023
Jtitle	慶應義塾大学言語文化研究所紀要 (Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies). No.54 (2023. 3) ,p.219- 240
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069467-00000054-0219

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

キケロー『ブルートゥス』試訳(IV)¹: § 61～ § 94

小 池 和 子

(1) 訳出範囲の概要

以下ではキケロー『ブルートゥス』 § 61～ § 94の訳出を試みる。年代としては前2世紀初頭～中葉であり、弁論家としては大カトーとその（主として年少の）同時代人が扱われる。

構成の上では、§ 61～ § 76と § 77～ § 94の前後2つの部分に、まず大きく分けることができる。前半部分では、より古い時代の弁論（とりわけアッピウス・クラウディウス・カエクスのそれ）の存在を指摘しつつも、カトーこそが「彼より以前の人で、その作品を紹介すべきであると思う人物はいない」（§ 61）存在であるとし、ローマの弁論家の歴史におけるカトーの重要性とその業績を語る。ここでキケローが強く主張するのは、その重要性にもかかわらず、カトーの弁論がキケロー当時のローマにおいて、ほとんど忘れ去られたような状態にあるということである。キケローは、カトーがリュウシアースとの類似性を有しながら、後者に比べて不当に低く評価されていることを指摘して、カトーを正しく評価すべきことを訴える（§ 63～ § 69）。そこから（§ 70以下）話はカトーその人から離れ、かつ弁論よりも広がってギリシア美術やローマ文学の草創期にまでも及び、総括すれば、いずれの

1 『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第53号（2022）pp. 165-180の「キケロー『ブルートゥス』試訳（Ⅲ）： § 39～ § 60」より続く。なお、以下でこの試訳や、同紀要に掲載したそれ以前の『ブルートゥス』試訳（詳細は参考文献を参照）を参照する際には、“試訳（Ⅲ）”などと略記する。

『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第54号（2023）pp.219-240

学芸の分野においてもただちに円熟に至るわけではなく、未熟な段階の成果には、時代の状況に即した評価を与えるべきだという主旨の主張がなされる。

このように前半部分では、アッピウス・クラウディウスなどの弁論についての言及はあるものの、基本的には扱われる弁論家はカトーのみである。カトーの名は後半部分でも散見され、特に § 80 と § 89 では、最晩年の彼によるガルバ（後述するように後半部分での主要人物）の弾劾が記される。それはカトーの事績を伝えるものであるとともに、この出来事の年代的位置づけや、ガルバとカトーの世代差を意識させるものでもある。§ 89 では、カトーの『起源』を、キケローがこの弾劾事件の典拠として用いていることも示されている。このようにカトーは、今回の訳出部分全体にわたって、時代を象徴する存在になっていると言える。

さて後半部分では、取り上げられる弁論家たちは合計で20人以上にもなる。しかしほとんどの人々の紹介はごく簡単なものであり、§ 82 冒頭までで終わる。その後で登場するのが、小スキーピオーとラエリウス、そしてガルバである。小スキーピオーとラエリウスもその弁論能力を称えられ、両者の友情についての言及も含めて敬意を込めた扱いをされているが（§ 83～§ 84）、キケローが「議論の余地なく（中略）雄弁では傑出していた」（§ 82）として特に評価するのは、「疑いもなく、ラテン語の弁論家たちの中で初めて」修辞学上の諸技術を見事に実践したというガルバである。ラエリウスが放棄せざるを得なかった弁護を引き継いだ彼の奮闘と勝利（§ 85～§ 88）、さらに彼自身が受けた弾劾（§ 89～§ 90）の2つの具体的なエピソードを通して、ガルバの弁論家としての力量、とりわけ人の心を強く揺り動かす彼の力が精彩に富んだ言葉で描き出されている。

こうしたガルバの扱いの背景には、前半部分のカトーと同様に、ガルバにも正しい評価が行われにくかったことがあると思われる。§ 82 においてキケローは、ガルバの雄弁と弁論の歴史における重要性を述べた後、しかしそのように雄弁なはずのガルバの弁論が、なぜか「幾分貧弱」で、ラエリウスやスキーピオーと、さらにはカトーと比べてすら「古くささを感じさせ」と

指摘する。すなわち、ガルバが書いて残した弁論が、彼の名声に比して期待外れということである。この問題が再び取り上げられる §91以下では、今度はブルートゥスが「もし弁論家ガルバにそれほどの力があったのなら、それが彼の弁論の中には一切現れていないのは、いったいどういう理由からでしょうか」 (§91) という率直な疑問をぶつける。これに対するキケローの解答は、かいつまんで言えば、話すのは巧みであるものの、書く際にはそれと同等の力を発揮できない類いの弁論家も存在し、ガルバはその典型であった、というものである。裏返せばキケローは、実際に行われた弁論から文字のテキストにはならず失われた言葉、あるいは文字では表せない激しい情動の発露、ジェスチャーなどを含めて、ガルバという弁論家を理解し、評価しようとしていると言える。

このように、今回の訳出範囲では、前半と後半でそれぞれ状況は違うものの、残されたテキストを単純に読むだけでは、その弁論家のことを知ることはできないというキケローの姿勢が示されており、興味深い。

(2) 訳文

61. このケテグスに世代で続くのがカトー²であり、彼はケテグスから9年後〔前195年〕に執政官になった。我々はカトーのことを非常に昔の人としてとらえる。彼が亡くなったのはルーキウス・マルキウスとマーニウス・マーニウスが執政官の年〔前149年〕であり、それは私が執政官の年〔前63年〕からきっかり86年前のことである。実を言えば、彼より以前の人で、その作品を紹介すべきであると思う人物はいない。もっとも、アッピウス・

2 マルクス・ポルキウス・カトー（前234年～前149年）。前195年に執政官、前184年に監察官。政治家として活発に活動し、特に大スキピオとの対立や、カルタゴの危険を訴え、徹底的に滅ぼすよう主張したことはよく知られる。一方でラテン語散文の歴史においても重要な足跡を残した。しかし現在実質的に残っている作品は『農耕論』のみであり、キケローの時代には150以上も伝存していたという (§65) 弁論についても、ローマ人がラテン語で記した最初の歴史書として重要な意義を持つ『起源』 (§66, §75, §89) も、断片しか残っていない。

カエクスによるピュッロスに関する例の弁論³や、幾つかの葬禮演説⁴に興じる人があるなら、話は別だが。**62.** 驚くことに、そのような葬禮演説は確かに現存するのだ。諸々の家門が自ら、己についての顕彰や記念物のようなものとして、それらを保存していたからである。それは、同じ一族の誰かが亡くなった時に使うためでもあり、家の誉れを伝えるためでもあり、かつまた、己の貴顕ぶりを煌々と照らし出すためでもあった。もっとも、こうした葬禮演説のせいで、我々の事績の歴史は幾分不正確になったのだが。なぜなら、それらの演説の中には、実際に行われたのではないことが数多く記されているからだ。嘘の凱旋式、水増しした執政官就任数、さらには偽りの家系図もあれば、より低い身分の者を、名前を同じくする縁もゆかりもない一族に混ぜ込み、平民身分に移ったと称するものもある。喩えて言うなら、私が、自分はマーニウス・トゥッリウス⁵の血を引いていると称するようなものだ。そのトゥッリウスとは、パトリキイーで、セルウィウス・スルピキウスと共に、王政追放から10年後に執政官をつとめた人である。**63.** さてカトーの弁論は、非常に多くの弁論があると思われるアッティカのリューシアース⁶に——彼は確かにアテーナイで生まれ、死に、市民のあらゆるつとめを果たしたわけだから、アッティカの人だ。もっともティーマイオスは、まるでリキニウス＝ムーキウス法に基づくかのように、彼をシュラクーサイ

3 試訳(Ⅲ) p. 174 sq. (§ 55と注46、注47)を参照。このように弁論が(キケロー当時)残っており、知名度も拔群であるにもかかわらず、キケローが彼ではなくケテグスをローマにおける最初の真の弁論家としていること(即ち、ローマにおける弁論の発展を取って遅らせていること)については、van den Bergが最近の研究で、本作品の構想と関連させた興味深い見解を示している。「はじめに」で示したカトーやガルバの扱いについても参考にするところが多かった。van den Berg (2019)、およびそれを下敷きにした同(2021)のChapter 5-6を参照。

4 ローマでは、名家の人物の葬儀において、縁者が追悼演説を行う習慣が古くからあった。例えばクィントゥス・ファビウス・マクシムス(試訳(Ⅲ) p. 177注61)は、息子のために葬禮演説を行っている(『大カトー 老年について』12)。クィントゥス・カエキリウス・メテッルスが父のために行った葬禮演説については、試訳(Ⅲ) p.177注62を参照。

5 マーニウス・トゥッリウス・ロンクス。前500年の執政官。

6 試訳(Ⅱ) p. 150 (§ 35と注38、注39)を参照。

に取り戻そうとしている⁷——劣らないほどの数がある。また、この両者には、弁論においてのみならず、当人たちの間にも、何か似たところが少なくない⁸。彼らは共に鋭く、洗練されていて、巧妙で、簡潔である。だが、ギリシアの人の方が、称賛のあらゆる側面から見て、より幸運である。64. というのも彼には、豊かに肉付いた身体よりもほっそりした身体を追求する⁹ような類いの、確実な支持者がいるからである。そういった人々は、健康状態さえ良ければ、痩身を好ましく思うのだ。もっともリュースィアースには、しばしば力こぶも、しかも、それ以上強靱なものは存在し得ないような力こぶがある。とはいえ確かに全体として見れば細身の方だ。だがともかくリュースィアースには、彼の緻密さ¹⁰そのものを大層もてはやするような称賛者たちがいるのだ。65. 対するにカトーの方は、現存する我々の弁論家たちのいった誰かが、彼を読んだことがあるのだろうか。あるいはそもそも、誰が彼を知っているだろうか。しかるに、良き神々よ、彼は何という人物であったことか！ 市民としての彼、元老院議員としての彼、あるいは最高司令官としての彼については触れない。ここで問題にしているのは、弁論家としての彼

7 リュースィアースはアテーナイで生まれたが、彼の父ケパロスはシキリアのシュラクターサイ出身だった。自身もシキリア出身であり、38巻に及ぶシキリア史(散逸)を記したティーマイオス(リュクールゴスに関する彼の説については、試訳(Ⅲ) p.167注9を参照)は、恐らく、名高い弁論家リュースィアースのルーツがシュラクターサイにあることを主張したのだろう。リキニウス＝ムーキウス法(前95年)は、ローマ市民権を詐称する(とりわけイタリア同盟諸都市出身の)者たちを本来の地位に戻らせるもの。一方、当時のアテーナイでは、両親ともにアテーナイ人である者のみがアテーナイ市民たりえた。ただしリュースィアース父子は正式に居留外国人(μέτριοι)として暮らしており、アテーナイ市民を詐称していたわけではない。

8 少なくとも現存するカトーの作品(ただし注2でも述べたように、弁論はほぼ散逸)から判断する限り、彼の文体はこなれているとは言いがたい。キケロー自身も§69ではその点を認めており、また§293では「ほとんど笑いをこらえられなかった」、「(確かにカトーは傑出した人物だが)弁論家だって? それどころか、リュースィアースに似ているだって?」とアッティクスに言わせている。

9 装飾の少ない文体を好むことを指す。

10 原文はsubtilitatem。キケローは§35でも彼のことを「緻密な書き手(subtilis scriptor)」と評していた。同じ形容を以下の§65ではカトーについても用いている。

であるのだから。称賛演説において彼以上に重厚な人、罵倒演説において彼以上に苛烈な人、見解の表明において彼以上に鋭い人、説明し論証することにおいて彼以上に緻密な人がいるだろうか。私がこれまでに見つけて読んだ彼の150以上の弁論は、文章も中身も輝かしいもので満たされている。これらから、注目し称賛に値するものを選び出してみるとよい。弁論の持ちうるあらゆる美点が、そこに見出されるだろう。**66.** さらに彼の『起源』に、雄弁の花や光で、何か欠けているものがあるだろうか。だがこの人には、愛好者がいない。何世紀も前に、シュラクーサイのピリストス¹¹や他ならぬトゥーキューディデースにも愛好者がいなかったのと同じである。それはこういうわけだ。この2人の無愛想な、また簡潔かつ極度に尖鋭化した文体のせいで時には十分に明快でないことすらある意見の述べ方は、テオポンボスの高揚した高雅な言葉遣いの前には——リュースィアースとデーモステネースとの関係と同様に——影が薄い。ちょうどそのように、カトーの放つ光は、後世の人々の、いわば山のごとくに積みあげられた弁論に覆い隠されてしまっている。**67.** だが、我々が同胞の物知らずとはこんな有様だ。すなわち、ギリシアのものであれば、古めかしいことや、彼らが「アッティカ風」¹²と称するところの緻密さを喜ぶ。その同じ当人たちが、それと同じものがカトーにあることを知りもしないでいるのだ。彼らはヒュベレイデース¹³やリュースィアースのようになりたいと望んでいる。立派なことだ。だが、なぜカトーのようになりたいとは考えないのか？ **68.** 彼らは、自分たちはアッティカ風の話し方を喜ぶと言う。それは確かに賢明なことだ。骨格だけでなく、血潮も真似てほしいものだが。それでも、彼らがそのように望んでいる

11 『起源』が歴史書であることから、ここは歴史家たちの文章を比較している。ピリストス（前430年頃～前356年）は『シケリア史』を記した（断片のみ）。テオポンボス（キーオス島出身、前4世紀）はイソクラテースの弟子とされ、弁論家としても活動した。当時の歴史家たちの一部には、とりわけ修辭的な完成を追求する傾向があり、テオポンボスの『ギリシア史』などの歴史書（いずれも断片のみ）は、その代表的な例とされている。

12 試訳（Ⅱ）p. 152注48を参照。

13 試訳（Ⅱ）p. 151 § 36と注41を参照。

ことは好ましいことだ。それではなぜ、リューシアースやヒュペレイデースが好まれるのか、カトーはとことん無視されるのに？ カトーの話し方は少々古くさく、洗練の足りない言葉もいくらかある。だがそれは、当時の人々がそういう話し方だったからだ。カトーには時代的に不可能であった点については変えて、リズムを加え、文章がより整ったものとなるように、言葉を組み立て、いわば接着してみたまえ——そのようなことは、昔は他ならぬギリシア人すら、習慣的に行っていたわけではないのだ。さあ今や、カトーに優る人は誰一人いなくなるだろう。69. ギリシア人は、彼らが「トロポイ」と呼ぶ言葉の転用や、「スケーマタ」と呼ぶ、考えと言葉の表現形式¹⁴を用いると、弁論が立派に整えられると考えている。この両方の種類について、カトーがそれらをどれほど頻繁に使い、しかも見事でもあるのは、信じがたいほどだ。もちろん、この弁論家がまだ十分に磨き上げられてはいないこと、何かもっと完璧なものが求められなくてはならないことは、私も気づいていないわけではない。だがそれは彼が、我々の時代から見ると、彼より古いところでは読むに値する書物は誰のものも残っていないような、それほど昔の人であるからだ。しかし古さというものは、あらゆる学芸において大きな譽れを与えられている。唯一、この弁論術だけが例外だ。

70. というのも、軽少な類いの学芸¹⁵に注意を向ける人のうちで、カナコ

14 順にτρόποι (比喩) とσχήματα (文彩)。τρόποιには隠喩をはじめとする様々な比喩表現が含まれる。キケロー『弁論家について』3. 155-169や、クイーンティリアース『弁論家の教育』8. 6参照。文彩は言葉の文彩と考えの文彩に分類され、本文中の「考えと言葉の」はそれを指している。言葉の文彩は、例えば同一単語の反復や、対句的な表現、通常の語順からの逸脱等々、言葉遣いそのものにおける表現の型を指し、どちらかと言えば文章としての響きの心地よさや面白さを追求するものである。一方、考えの文彩とは、より内容面で、論者の主張を的確に提示し、聴衆の関心を引きつけ、心をつかむのに有効な表現の型を指す(例えば修辭疑問、ほのめかし、余談、喩え話などもその一例)。どちらの文彩も非常に多様な種類がある。詳しくはキケロー『弁論家について』3. 200-207、クイーンティリアース『弁論家の教育』9. 1-3を参照。

15 彫刻や絵画の類いを指す。キケローのギリシア美術愛好については、たとえば『アッティクス宛書簡集』1. 8. 2, 1. 9. 2, 1. 10. 3-4などを参照。

スの彫刻が、本物を真似ようとするにはこわばりすぎていることを知らない人がいるだろうか¹⁶。カラムスのものも確かに固いが、カナコスのものよりは柔らかくできている。ミュロンの作品は、まだ十分に本物に迫ってはいないものの、すでにためらうことなく美しいと言えるほどのものになっている。さらに美しいのはポリュクリトスの作品で、これはもうまったく完璧なものだ¹⁷。ともかく私には、そう思われるのが常だ。絵画においても同じような説明ができる。この場合、ゼウクシスやポリュグノートスやティマンテース¹⁸を、そして4色以上の色を用いなかった画家たちの描いた形状や輪郭線を我々は称賛する。だがアエティオン、ニコマコス、プロートゲネース、アペッレース¹⁹になると、もはや全てが完璧になる。71. おそらく、他のあらゆる分野でも同じことが起こるのではないかと思う。即ち、発明されたと同時に完璧になるものは何一つない。ホメーロス以前にも詩人が存在したことは疑うべきではない。そのことは、彼の作品において、パイアーケース人の宴席で歌われている歌からも、また求婚者たちの宴席で歌われている歌からも、察することが可能である²⁰。ではどうかね、我々の古い時代の詩はどこにあるのか？

「かつてファウヌスらや古の詩人らが歌っていたところの²¹。

16 § 69からの話の流れからすれば、それでもカナコスは高く評価されているといった意の記述が予期される場所（実際に絵画の方では、ゼウクシスらの古い画家たちが称賛されているという言及がある）。

17 以上の4人は、いずれも前5世紀に活躍したギリシアの彫刻家。

18 いずれも前5世紀に活躍したギリシアの画家。4色の色とは、白、赤、黒、黄。

19 いずれも前4世紀後半に活躍したギリシアの画家。

20 共に『オデュッセイア』における例。パイアーケース人の宴席には（第8巻）デーモドコスという詩人が、イタケーの求婚者たちの宴席には（第1巻、第17巻、第22巻）ペーミオスという詩人が、それぞれ登場する。

21 しばしばラテン詩の父と称されるクィントゥス・エンニウス（前239年～前169年）の『年代記』第7巻からの引用（214-216 Vahlen = 207-209 Skutsch）。既に他の人々（ナエウィウスが意識されている）が記したことを、自身が第1次ポエニー戦争を扱わなかった理由とするとともに、それらの人々に対する、自身の詩人としての優越性を表明したもの。最初の行は、ギリシアから伝わった韻律ではない、古い詩の形で歌っていたことを指している。この部分は関係代名詞節で、先

この者より以前には誰一人、ムーサイの岩山を*****²²、

***また、言葉に熱意を持った者もいなかったとき」

と、本人²³が自分自身について語っているが、その誇らしげな言葉に偽りはない。状況はまさにその通りなのだ。すなわち、ラテン語訳の『オデュッセイア』はちょうど何かダイダロスの作品²⁴のようであり、リーウィウス²⁵の劇作品は再読する価値に乏しい。72. とはいっても、初めて劇を上演したのは、このリーウィウスである。それは、カエクスの息子ガイーウス・クラウディウスとマルクス・トゥディターヌスが執政官の年〔前240年〕のことであり、すなわちエンニウスが生まれるまさにその前年に、そしてローマ建国からは514年目にあたる。この人²⁶が言うところではね。私は彼に従っている。というのも、諸作家の間では年の数え方について論争があるからだ。アッキウス²⁷は、リーウィウスは、5度目の執政官職在任中〔前209年〕のクイーントゥス・マクシムス²⁸に、タレントウムで捕虜にされたのだと——その年は、アッティクスの書物によればリーウィウスが劇を上演してから30

行詞およびそれと同じ文に属する前の行 (213 Vahlen = 206 Skutsch) は § 76 で引用されている。両者を合わせて訳すと「かつてファウヌスらや古の詩人らが歌っていたところの詩 (の形) で、すでに他の人たちが、その事績を記した」(下線部が § 76 で引用される部分) のようになる。

- 22 次の行の冒頭部にかけて、詩行の一部を省略して引用が行われている。また Skutsch は、原文の *cum neque Musarum scopulos / nec dicti studiosus quisquam erat ante hunc* のうち、*cum* と *quisquam erat* をキケロー自身による挿入とみなしている。
- 23 エンニウス。
- 24 クレータの迷宮の建造や、イーカロスの墜落につながる翼の作成など、超人的な技術力や発明力の伝説が伝わるダイダロスだが、ここでは非常に古い、まだ未発展の時代の例として取り上げられている。
- 25 ラテン文学の創始者とされるリーウィウス・アンドロニクスのこと。直前で言及されたラテン語訳の『オデュッセイア』も彼の手による。
- 26 アッティクスを指す。
- 27 悲劇詩人のルーキウス・アッキウス。前170年生まれだが、前106年生まれの子ケケローとも親交があった (§ 107 参照)。ここでアッキウスが主張した年代が否定されることの意味については、van den Berg (2021), Chapter 5 (特に160以下) を参照。
- 28 § 57 で言及されたのと同人物。

年後²⁹であり、我々もまた、そのように古い記録に³⁰見出すことができる——、73. さらに、リーウィウスが劇を上演したのは、その11年後の、ガイウス・コルネーリウスとクィントゥス・ミヌキウスが執政官の年〔前197年〕に実施された、かつてサリーナートルがセーナの戦いの勝利³¹で奉納したユウェンタース祭においてであると記した。ここでアッキウスの犯した誤りは実にひどいもので、この2名が執政官の年には、エンニウスは既に40才に達している。リーウィウスがエンニウスと同年配ということになったら、最初の劇上演者であるはずのリーウィウスが、前述の執政官の年よりも以前に既に多くの劇を上演しているプラウトゥスとナエウィウスの両名よりも、いくらか年下ということになってしまう。74. もしこういう話が、今のこの会話にあまり適していないと思われるのであれば、ブルートゥスよ、アッティクスのせいにしたまえ。著名な人々の世代や時代を探求する情熱で私を焚きつけたのは、彼なのだから」

するとブルートゥスが言った。「いえ私は、あなたがいわば時代に目印をつけて行かれるのを楽しんでいますし、その注意深さは、あなたが着手された、弁論家の種類を世代で区別するという事に適したものであるとも思います」。

75. 私は言った。「ブルートゥスよ、君は正しく理解している。願わくば、あれらの歌が残っていてくれればよかったのだが。すなわちカトーが『起源』の中で、己の世代よりも何世紀も前に、宴席で個々の参席者たちが、輝かしい人々を称えて歌うのを常としていたと書き残している歌のことだ。もっとも、エンニウスが古の詩人やファウヌスたちの中に数えている³²かの

29 正確には31年後（含み算であれば32年後）。次の「11年後」も12年後ないし13年後。

30 原文はin antiquis commentariis。具体的にどのようなものを指しているのかは不明。

31 前207年、マルクス・リーウィウス・サリーナートル（2度目の執政官在任中）が、イタリア半島北部の都市セーナ近郊を流れるメタウルス河畔で、ハンニバルの弟のハスドルバルと戦って勝利。ハスドルバルがハンニバルに合流するのを防いだ。

32 §71で引用された詩と当該の脚注を参照。

人³³の『ポエニー戦争』が、あたかもミュロンの作品のように楽しませてくれる。76. なるほどエンニウスの方が、これは確かなことだが、より完璧ではあるだろう。だが、もしエンニウスが、本当にかの人のことを——彼がそう装っているように——軽んじているのなら、あらゆる戦争を扱っておきながら、あの激烈きわまりなかった最初のポエニー戦争のことは書かないで置く、ということとはしなかったであろう。彼は自ら、なぜ書かなかったのか語っている。「すでに他の人たちが、その事績を詩で記した」と。しかも実に輝かしく記したのだ、たとえあなた³⁴ほどには磨き上げた形ではなかったとしても。あなたも違った風に考えるべきではない、ナエウィウスから多くを借用している——あなたが正直に認めるならそうなる——、あるいは盗用した——否定するならそうなる——あなたとしては。

77. さてカトーと同時期で、彼より年長であったのが、ガイウス・フラミニウス、ガイウス・ウァッロー、クィントゥス・マクシムス、クィントゥス・メテッルス、プーブリウス・レントゥルス、プーブリウス・クラッススである³⁵。最後にあげた人は、大アフ리카ヌス³⁶と共に執

33 ナエウィウス（試訳（Ⅲ）p.179注71）を指す。断片のみが残る『ポエニー戦争』（サートゥルニウス詩型）は、第1次ポエニー戦争を扱うと共に、トロイアに遡るローマの歴史も織り込まれていたと推測されているが、詳細は不明。

34 エンニウス。

35 カトーについて述べた後、しばらく話がそれたが、ここから再び弁論家たちの話に戻り、まずカトーの年長の同時代人たちについて述べられる。これら6人の弁論家のうち、フラミニウス、マクシムス、メテッルスの3人は既に§57で言及されている。ガイウス・テレンティウス・ウァッローは前216年の執政官のとき、カンナエでハンニバルに大敗を喫した人物。プーブリウス・レントゥルスは、前203年の法務官をつとめ、前196年にマケドニアに派遣され、和平交渉にあたった10人の使節団の一員プーブリウス・コルネリウス・レントゥルスに一般に同定される。プーブリウス・リキニウス・クラッスス・ディーウェス（前205年の執政官）については、歴史家リーウィウスが（30. 1. 5）、法廷弁論でも政治弁論でも極めて巧みであったと称えている。

36 プーブリウス・コルネリウス・スキピオー・アフ리카ヌス（前205年、前194年の執政官、大スキピオーとも称される）のことで、直後の「スキピオー」も彼のことを指す。前202年のザマの戦いでハンニバルに勝利し、第2次ポエニー戦争を終結に導いたことで名高い。彼の息子の1人プーブリウス・コル

政官を務めた。スキューピオー自身も、決して話せなかったわけではないと聞いている。だが彼の息子の、小スキューピオーをパウルス³⁷から養子にした人は、もし身体が丈夫であったなら、とりわけ能弁な人と考えられていたことだろう。彼の幾つかの短い弁論と、ギリシア語で極めて甘美に書かれた歴史書は、それを示唆している。**78.** 以上の人々と同じ数のうちに入るのが、セクストゥス・アエリウスだ³⁸。この人は市民法の専門家中の専門家だが、話すことにも用意のある人であった。一方、カトーよりも年少の人々には、ガイウス・スルピキウス・ガルスがいる³⁹。彼はギリシアの学芸に、あらゆるノービレスの中でもっとも打ち込んだ人であった。弁論家の数のうちに入ると考えられたが、同時に他の分野でも優れており、洗練されていた。既にこの頃には、人々の話し方は、より豊かできらびやかなものになっていた——このガルスが法務官としてアポローン祭を取り仕切った際に〔前169年〕、エンニウスが『テュエステース』を上演して、その後亡くなっているのだから⁴⁰。クィントゥス・マルキウスとグナエウス・セルウィーリウスが執政官の年のことである。**79.** 同じ頃に、プーブリウスの子ティベリウス・グラックス⁴¹がいた。執政官を2度務め、監察官になった人だ。彼が口

ネーリウス・スキューピオー（前180年に鳥卜官に就任）は、文中にもあるように、身体の弱さから国政にはほとんど関わらなかった。また娘の1人は、グラックス兄弟の母として知られるコルネーリア（§ 104、§ 211）。なお、§ 80～82で言及される「アーフリカーヌス」は、すべて小スキューピオーのことを指す。小スキューピオーその人については注57を参照。

37 この人名はPaulus（パウルス）またはPaullus（パウッルス）と綴られ、底本ではここではa Pauloとなっているが、§ 80ではPaullusと綴られている。今回の訳出範囲以外の部分でも、2つの綴りの混在が認められる。いずれも、底本の綴り通りに表記する。人物については注47を参照。

38 セクストゥス・アエリウス・パエトゥス（前198年の執政官、前194年に監察官）。聡明さゆえにカトゥス（Catus）の添え名を得ていた（注42も参照）。Triperitaと題する法学書（現存せず）を記した。

39 前166年の執政官。特に天文学に通じており、月食や日食の予告もしていたことなどを、キケロー自身が『大カトー・老年について』49で伝えている。

40 エンニウスがラテン語やラテン文学の発展の上で一時代を築いた存在としてとらえられており、今やその彼が死去するまでに時間は経過していたのだから、ということ。

41 グラックス兄弟の父。2度の執政官は前177年と前163年であり、監察官となった

ドス人の前でギリシア語で行った演説が残っている。この人が重要な市民であると同時に雄弁でもあったことは確かだ。また、「コルクウム」と呼ばれ、やはり執政官を2度と、監察官を務めたプーブリウス・スキピオー・ナーシーカ⁴²も、雄弁な人と考えられていたという話だ。彼は、あの、聖像を受け取った人物⁴³の息子に当たる。ガイウス・フィグルスと共に執政官を務めたルーキウス・レントゥルス⁴⁴も、雄弁だったようだ。マルクスの子クィントゥス・ノービリオル⁴⁵は親にならって文芸の研究に身を捧げたし——彼は、自分の父⁴⁶と共にアイトーリアに従軍したクィントゥス・エン

のは前169年。

- 42 プーブリウス・コルネーリウス・スキピオー・ナーシーカ。2度の執政官職は前162年と前155年、監察官就任は前159年。ただし最初の執政官職は、選挙を主宰した前163年の執政官ティベリウス・グラックス（前出と同一人物）が鳥占いを正しく行わなかったことが判明したため、同僚のガイウス・マルクス・フィグルスと共に退任を余儀なくされた。「コルクウム」は直訳すると「小さな心臓」。キケロー『トゥスクルム荘対談集』1. 18に次のようにある：「ある者は魂（animus）は心臓（cor）自体だと考え、そこからexcordes（心がない＝愚かな）、vecordes（心が欠如している＝精神が錯乱した）、concordes（心を合わせた＝一致した）という言葉ができたのだと言い、あの2度も執政官になった思慮深いナーシーカは、Corculum（心のある人＝知恵者）というあだ名を得たし、また、次のような言い方もある〔小池付記：以下はエンニウスの引用〕。ずば抜けてcordatus（心のある＝賢明な人）、明敏な〔小池付記：catus〕アエリウス・セクストゥス」（木村・岩谷訳。参考文献を参照）。プーブリウス・コルネーリウス・スキピオー・ナーシーカ（前191年の執政官）。前204年、シビュラの書の予言に従って、Mater Magnaの聖像をローマに迎えるにあたり、市民の中で最も優れた人物として受取り役に選ばれた。
- 43 プーブリウス・コルネーリウス・スキピオー・ナーシーカ（前191年の執政官）。前204年、シビュラの書の予言に基づいてMater Magnaの聖像をローマに迎えるにあたり、市民の中で最も優れた人物として受取り役に選ばれた。
- 44 ルーキウス・コルネーリウス・レントゥルス・ルプス（前156年の執政官）。弁論家としての彼については、この箇所以外に特に証言がない。
- 45 クィントゥス・フルウィウス・ノービリオル。以下にあるように、ティトゥス・アンニウス・ルスクスと共に前153年に執政官を務めた。
- 46 マルクス・フルウィウス・ノービリオル（前189年の執政官）。エンニウスの有力なパトロンであり、アイトーリアにおける勝利は、エンニウス『年代記』などで扱われた。

ニウスに市民権を贈ってもいる、それは彼が三人委員として植民を行ったときのことだ——、そのクィントゥス・ノービリオルの同僚であったティトゥス・アンニウス・ルスクスも、能弁でないことはなかったと伝えられている。**80.** さらに、アーフリカーヌスの実父であるルーキウス・パウッルス⁴⁷も、弁論を行うことで、第一人者の市民としての役割を易々と守っていた⁴⁸。カトーが当時なお存命である中で——彼は89歳で世を去ったのだが、それはまさにその同じ年に、セルウィウス・ガルバを弾劾して、市民の前で最高に精力的に弁論を行った後のことであった⁴⁹。彼はその演説も書いて残している——だが、ともかくカトーがまだ生きていた間に、彼より年少の多くの弁論家たちが一気に花開いたのである。**81.** すなわち、ギリシア語で歴史を書いたアウルス・アルビーヌス⁵⁰もいた。ルーキウス・ルークッルスと共に執政官を務めた人で、文芸に通じていると同時に、能弁でもあった。彼に並んで、セルウィウス・フルウィウスと、法学にも文学にも古事にもよく通じていたヌメリウス・ファビウス・ピクトルも、それなりの位置を占めていた⁵¹。

47 ルーキウス・アエミリウス・パウッルス（前182年、168年の執政官）。2度目の執政官の際、マケドニア戦争の指揮を執り、ピュドナの戦いでペルセウス王に勝利を挙げた。4人の息子に恵まれ、うち2人を養子に出したが、手元に残した2人に、それぞれマケドニア戦争の凱旋式の直前・直後に先立たれた。その悲しみを堪えて市民の前で行ったとされる弁論の一部が残っている（ウァレリウス・マクシムス『著名言行録』5. 10. 2参照）。

48 原文は *personam principis civis facile dicendo tuebatur*。Douglas、Kasterともに *facile* は *tuebatur* にかけて理解しており、上の訳文もそれに従っているが、*dicendo* にかけて「易々と（苦もなく）話すことによって」と理解することも可能と思われる。実際に § 221 ではガイウス・カルポーの弁論能力について、*facile dicebat* と言われている。

49 ガルバについては注58、弾劾については § 89 以下を参照。

50 アウルス・ポストゥミウス・アルビーヌス（前151年の執政官）。ポリュビオスは『歴史』39. 1. 1以下で、アルビーヌスがギリシアの学芸とギリシア語の習得に非常に熱心に打ち込み、ギリシア語で歴史のみならず詩も記すほどであったと伝えている。

51 この2名の同定は必ずしも明確ではない（DouglasおよびKasterの当該箇所注釈・脚注を参照）。前2世紀において、セルウィウス・フルウィウスの名を持つ人物は、セルウィウス・フルウィウス・フラックス（前135年の執政官）以外に知られていない。彼に同定する場合、この前後に言及される人々と比べて執政官就

クィントゥス・ファビウス・ラベオー⁵²も、同様の褒め言葉で飾られる人であった。クィントゥス・メテッルス⁵³——息子4人が執政官になった人のことだ——はとりわけ雄弁と考えられていた。彼は、アフリカーヌスがルーキウス・コッタ⁵⁴を訴追した際に、コッタを弁護している。メテッルスの弁論は他にも残っているが、ティベリウス・グラックスを弾劾した弁論は、ガイウス・ファンニウス⁵⁵の『年代記』の中に再現されている。**82.** 当のルーキウス・コッタは老獪な人と考えられていた。しかし、ガイウス・ラエリウス⁵⁶とプーブリウス・アフリカーヌス⁵⁷がとりわけ雄弁だった。

-
- 任年が遅い=年少である、という不都合がある（ただし、出世が遅かったと考えることは可能である）。ヌメリウス・ファビウス・ピクトルは、ゲッリウス『アッティカ夜話』1. 12. 14やマクロビウス『サートウルナーリア』3. 2. 11などで、神祇官に関する法についての著作があるとされているファビウス・ピクトル（両作家とも、*praenomen*は記していない）の可能性があるが、推測の域を出ない。
- 52 この人物も同定に問題がある。前2世紀で同じ名前を持つのは、前183年の執政官を務めた人物のみだが、他の人々と世代があわない。同執政官に同じ名前前の縁者（息子？）がいた可能性はあるが、やはり推測の域を出ない。
- 53 クィントゥス・カエキリウス・メテッルス・マケドニクス（前143年の執政官）。ここで言及されている2つの弁論はいずれも現存しない（コッタについては次の注を参照。ティベリウス・グラックスについては§ 103の注で改めて扱う）。cf. *ORF* pp. 106-108.
- 54 ルーキウス・アウレーリウス・コッタ（前144年の執政官）。彼の弁論については特に知られていない。キケロー『ムーレーナ弁護』58によれば、審判人たちがアフリカーヌス（小スキピオー）のあまりの権威をむしろ敬遠して、コッタを無罪にしたという。ただしアッピアーノス『内戦記』1. 22. 92では、コッタが賄賂を用いたとする。
- 55 当該時期にはガイウス・ファンニウスの名前を持つ人物が2人いたが、既にキケロー自身の時代においても、両者についての混同があった（『アッティクス宛書簡集』12. 5b参照）。この問題については、2人のファンニウスについて言及される§ 99の注で改めて扱う。
- 56 ガイウス・ラエリウス（前140年の執政官）。キケローは彼に非常な敬意と憧れを抱いていたようであり、対話篇『国家について』、『大カトー 老年について』の登場人物にもしているが、特に『ラエリウス 友情について』では主役の地位を与えている（ラエリウスと小スキピオーとの交友は、とりわけこの作品が有名にした）。
- 57 プーブリウス・コルネーリウス・スキピオー・アエミリアヌス・アフリ

彼らの弁論は現存しており、それらをもとに、この二人の弁論家の才能について評価することが可能である。けれども、彼らの間にあって、世代的には幾分上にはなるが、議論の余地なく、セルウィウス・ガルバ⁵⁸が雄弁では傑出していた。彼はまた疑いもなく、ラテン語の弁論家たちの中で初めて、あの、弁論家に特有の、喩えて言えば法に要求されているとでも言うべき仕事を行った人であった。つまり、弁論を飾るために、主題からの脱線を行ったり、聴衆の心を楽しませたり、あるいは感動させたり、話を大きくしたり、憐れみを呼び起こしたり、普遍的な論点⁵⁹を用いる、ということをした人であった。だがどういうわけか、雄弁で傑出していたことが確かであるこの人の弁論は、幾分貧弱なのだ。そして、ラエリウスやスキピオの弁論と比べて、あるいは他ならぬカトーの弁論と比べてすら、古くささを感じさせるのだ。そのため彼の弁論はカラカラに干からびてしまい、今やほとんど姿が見えないほどである。

83. 他ならぬラエリウスとスキピオの才能については、兩人共に最大限の名声を有しているものの、話すことに関しては、ラエリウスの方がより輝かしい名声を得ている。もっとも、ラエリウスが同僚団について行った弁論⁶⁰が、スキピオの多くの弁論のうちの任意のいずれかと比べて、

カーヌス（小スキピオ、小アフリカーヌス。前147年、前134年の執政官）。政治・軍事両面で活躍したが、とりわけ前146年に第3次ポエニ戦争を終結に導いたことと、前133年に20年にわたって続いてきたヒスパニアにおけるヌマンティア戦争を終結させたことは名高い。前129年に急死（彼を主演とするケケロー『国家について』の作品中の時間は、その死の直前の時期に設定されている）。ティベリウス・グラックスの改革に批判的な政策を取っていたことから、改革派による暗殺を疑う説もあるが、詳細は不明である。歴史家ポリュビオスとの親交、テレンティウスやルキウスへの後援も知られる。

58 セルウィウス・スルピキウス・ガルバ（前144年の執政官、前出のコッタと同年）。前168年、マケドニア戦争に軍団副官として従軍していることから、前200年頃に生まれたと推測されている（小スキピオは前185／184年生まれ、ラエリウスは前190年頃の生まれ）。cf. *ORF* pp.109-115.

59 試訳（Ⅲ）p. 170注24参照。

60 ラエリウスの傑作とされる弁論。同僚団は鳥卜官の神官同僚団のことを指す。この弁論でラエリウスは、新たに補充される鳥卜官の選出を民会で行うべきとする

優っているわけではないのだ。それはラエリウスの当該の弁論よりも甘美なものがあるからということでもなければ、宗教儀礼についてはもっと厳かに語り得るから、というわけでもない。そうではなくて、ラエリウスがスキープイオーよりもずっと古くさく、洗練されていないからなのだ。話すことについては様々な好みがあるが、ラエリウスは古風を楽しみ、積極的に少々古びた言葉を使っているのだと私は思う。**84.** だが、同じ1人の人が多方面で傑出していることが気に食わないのが、人間の習性というものである。戦争にまつわる誉れで——正にその面でも、ラエリウスがウィリアトゥス⁶¹との戦争においては見事な成果をあげたことを我々は知っている——アーフリカーヌスに肉薄することは何人にも不可能である。そのように、才能、文学、雄弁、ついには知恵に関しては、たとえ彼ら兩人にそろって第一級の地位を与えるととしても、ラエリウスの方を上位に置くことを人は好むのである。私には、他の人々の判定によるだけでなく、当の彼ら自身が、当人同士の間で譲り合って、そのような割り当てになっていたのだと思われる。**85.** 概してその当時の習いは、他の点においても今より優れていたが、正にこの点、すなわち人々が、各人に快くその長所を認めていたという点で、今より人情味のあるものであった。

私はスミュルナでプーブリウス・ルーティリウス・ルーフス⁶²から聞いた話を覚えている。彼がごく若い頃に起こったことだそうだが、プーブリウス・スキープイオーとデキムス・ブルトゥス——だったと思うが——の両執政官〔前138年〕が、元老院決議を受けて、恐ろしい重大な出来事についての

提案に反論し、成功を収めた。なお烏卜官の選出についてはその後も紆余曲折があり、キケロー自身は民会で選出されている。試訳（I）p.222注6および注7を参照。

61 ルーシターニー人の指導者。§ 89で言及されるガルバによる虐殺（前150年、命の保証をして投降させたルーシターニー人を、約束を違えて殺害ないし奴隷にした）を逃れ、その後長期にわたり、ローマに抵抗して戦った。ラエリウスが彼と戦ったのは、法務官在任時の前145年。

62 § 110を参照。

審問を行ったという。すなわち、シーラの森⁶³で殺人が起こり、名のある人たちが殺害され、奴隷たちに容疑がかけられ、さらには、監察官プーブリウス・コルネーリウスとルーキウス・メンミウスからピッチの生産所を請け負った⁶⁴組合に属する自由身分の者たちも何人か容疑をかけられたとき、元老院は、両執政官がこの件に関して審問を行い、決着をつけるよう決議したのだという。**86.** ラエリウスは請負人⁶⁵たちを弁護して、彼がいつもしていたように念入りに、かつ、洗練されたやり方で論じたという。だが執政官たちは、話を聞いた後、顧問団の見解を受けて、さらに詳しい聴聞を宣言した。そのためラエリウスは、数日の間をおいて再び、さらに丁寧に、いっそう見事に語ったが、執政官は再度同じように事を延期したのだそうだ。するとラエリウスは、組合員たちが彼を家まで送り、感謝して、どうか力尽きないでくれと懇願したのに対し、次のように言ったのだという。自分は、これまでしたことは、彼らの名誉のために熱意を持って念入りに行った。だが、この件については、セルウィウス・ガルバの方が——彼は話す際により熱く、また激しい人だから——壮麗かつ激しく弁護できると思う、と。こうして、ガーイウス・ラエリウスの勸奨に従い、請負人たちはこの案件をガルバのところを持って行った。**87.** だがガルバの方は、ラエリウスほどの人の後を引き受けなくてはならなかったわけなので、気後れしつつ、悩みながら引き受けたのだそうだ。ちょうど一時休廷のような日が、間に1日あった。その日の全てを、ガルバはこの案件を考察し、議論を組み立てるのに充てた。そして審問の日になり、ルーティリウスその人が、組合員たちの求めによって早朝ガルバの家を訪れた。それはガルバに思い出させ、弁論を行う時間に合わせて連れて行くためであった。そのときガルバは、執政官たちが下りて

63 ブルッティウム（イタリア半島の爪先部分の地域）にある森。良質なピッチの生産地として知られていた（cf. *Dion. Hal. rom. ant.* 20. 15）。ここで言及されている殺人事件については、これ以上の詳細は不明。

64 監察官と契約を結んでピッチの生産を請け負い、収益の一部を国に納める。

65 以下、キケローはこの組合の成員を、組合員（*socii*）とも請負人（*publicani*）とも称している。

きた⁶⁶と知らされるまでの間ずっと、あらゆる者を遠ざけて書齋に籠もり、素養のある奴隷たち——彼は彼らにそれぞれ別々のことを、同時に口述するのを常としていた——と共に準備を行っていたそうだ。そうこうするうちに、時間が来たことを知らされて、彼は母屋へと出て行ったが、その顔色と目つきは、準備を行っていた人のそれとは思われず、既に弁論をやり遂げたのだと思われるほどのものであったという。**88.** ルーティリウスが付け加えるには——彼はそのこともこの話に関係があると考えていた——前述の筆記奴隷たちは、ひどく消耗してガルバと共に出て行ったということだ。以上のことから、ガルバが、実際に弁論を行うときだけでなく、予行演習の際にも激烈で、燃えていたということが分かる。多くを語る必要がどこにある。大きな期待が寄せられ、大勢の人々が耳を傾ける中、他ならぬラエリウスの見ている前で、ガルバはその弁論演説を、極めて力強く、また極めて壮麗に述べたので、その弁論のうちで人々が黙ってやり過ごした部分はほとんどなかったという。ガルバの行った多くの抗議と、多くの同情喚起の結果、組合員たちは、全ての人々が賛同する中、その日、審問から放免されたということだ。**89.** ルーティリウスが語ったこの話から、次のように推測してもいいだろう。弁論家において最大の美点となるものには2種類あり⁶⁷——すなわち、1つは人々に分らせるために緻密な議論を行うことができること、もう1つは聴衆の心を揺り動かすために激烈に演説することができることだ——、審判人に分らせる人よりも、審判人を燃え上がらせる人の方が、遙かに多くのことを成し遂げるということからすれば、ラエリウスには精練があったのに対し、ガルバには力強さがあったのだ、と。その力強さがとりわけ認識されたのは、次のような時のことだった。すなわち、ルーシーターニー人が、法務官時のセルウィウス・ガルバによって、誓約に反して——と

66 審問の行われるフォルムが市内の低地にあったため。

67 キケローは3種類（聴衆に好意を抱かせる・教化する・心を動かす）に分ける説も用いている（§185や『弁論家について』2.115など）。この点については、§185の脚注で改めて扱う。

考えられていた——虐殺されたため、護民官ルーキウス・リーボー⁶⁸が人民を煽動し、ガルバに対して特定個人を名指しする法に似た⁶⁹法案を示したところ、先にも述べたように⁷⁰、既に変な高齢に達していたマルクス・カトーが法の成立を促し、ガルバを非難して大いに語った。カトーはその弁論を自身の『起源』の中に伝えているが、それは彼の死ぬ数日前、ないし数ヶ月前のことである⁷¹。**90.**そこで、そのときガルバは、自分自身のためには何も拒まず、ローマ人民の信義を哀願して、自分の幼い子供たちだけでなくガイウス・ガルス⁷²の息子のことをも、涙ながらに託した。ガルスの息子が孤児であり、泣いていたことは、彼の輝かしい父親の記憶がまだ新しかったがゆえに、驚くほど可哀想であった。それでガルバも難を逃れた。少年たちのために人民の哀れみの気持ちが揺り動かされたからである——同じくカトーが書き残しているように。なおリーボーの方も、その諸弁論から知ることができる限りでは、話せなくはなかったと思う。

91. 以上のような話をして、私は小休止をした。するとブルトゥスが言った。「もし弁論家ガルバにそれほどの力があったのなら、それが彼の弁論の中には一切現れていないのは、いったいどういう理由からでしょうか。書いたものを何一つ残していない人については、そういうことを不思議に思うことはできませんが」。

私は言った。「ブルトゥスよ、それは、書かないということの理由と、話したほどには上手く書けないということの理由は同じではないからなのだ。すなわち、怠惰ゆえに、何も書物の形にはしなかった弁論家たちがいることを我々は知っている。それは、法廷での労苦に、さらに家での労苦まで

68 ルーキウス・スクリーボーニウス・リーボー。この件に関係する以外の詳細は不明。

69 ガルバを直接名指ししてはいないものの、彼を狙うものであることが一目瞭然であるということか。

70 § 80。

71 カトーが死去したのは前149年。従ってこの件は、組合員たちの弁護よりも以前の話。

72 § 78のガイウス・スルピキウス・ガルスと同一人物。

が加わらないようにしたためだ——多くの弁論は、既に行われたものとして記されるのであって、これから行うために記されるのではないわけだから⁷³。92. また、より上手くなるための努力をしない、という弁論家たちもいる。書くことほど、話すことに役立つものはないから言うのだが。彼らは、自分の知性の記憶を後世に伝えることを望んでいないのだ、話すことについて、既に十分に大きな榮譽を得たと考え、評価する人々の判定に自分の書いたものが届かなければ、その榮譽がいつそう大きく見えるだろうと考えているということは。一方、自分は書くより話す方が巧みであると考えからという人々もいる。非常に才能はあるものの、十分に訓練を積んでいない人によく起こることで、まさにガルバがこれだった。93. おそらく、知性の力だけでなく、心の力と、そしてまた何か生まれつきの悲憤が、話している最中には彼を燃え上がらせ、高揚した、激しい、苛烈な弁論となるようにしていたのだろう。だがその後で、くつろいだ状態でペンを取ったとき、全ての情動があたかも嵐のように彼から去ってしまったときには、彼の言葉はしおれてしまったのだ。こういうことは、より磨きをかけた類いの話し方を追求する人たちには起こらないのが常である。なぜなら分別が弁論家を見捨てることは決してないからで、それを用いれば弁論家は書くのも話すのも同じようにできるわけだ。これに対し、心の情熱は常に伴うものではない。それがひとたび落ちてしまうと、弁論家が見せていた力と炎はすべて消えてしまう。94. 従ってこのような理由ゆえに、ラエリウスの精神は書いた作品の中にも息づいているように見えるのに対し、ガルバの力は死んでしまったように見えるのだ」

主要参考文献

Douglas, A. E. (ed.) *M. Tulli Ciceronis Brutus*. Oxford, 1966.

Hendrickson, G.L. *Cicero, Brutus*, Loeb Classical Library. Cambridge MA, 1962.

Kaster, R.A. *Cicero: Brutus and Orator*. Oxford, 2020.

Malcovati, H. (ed.) *Oratorum Romanorum fragmenta*. 2nd ed. Turin, 1955. = *ORF*

73 弁論を実施するに際し、完全な下書きを作成することが一般的ではなかったことを示唆する。

- Malcovati, H. (ed.) *M. Tulli Ciceronis scripta quae manserunt omnia*, fasc. 4: Brutus. editio altera. Leipzig, 1970. (底本)
- Piderit, K. W. & Friedrich, W. *Ciceros Brutus, für den Schulgebrauch*. Leipzig, 1889.
- Jahn, O.- Kroll, W. - Kytzler, B. *Cicero, Brutus*. Berlin, 1962.
- Skutsch, O. *The Annals of Q. Ennius*. Oxford, 1985
- Sumner, G. V. *The Orators in Cicero's Brutus: Prosopography and Chronology*. Phoenix Suppl. vol. 11. Tronto, 1973.
- Vahlen, J. *Ennianae poesis reliquiae: iteratis curis recensuit Ioannes Vahlen*. Leipzig 1903.
- van den Berg, C. S. "The Invention of Literary History in Cicero's Brutus." *CPh* 114 (2019), 573-603.
- van den Berg, C. S. *The Politics and Poetics of Cicero's Brutus: The Invention of Literary History*. Cambridge. Cambridge University Press 2021.
- キケロー『発想論』（『キケロー選集』第6巻に所収）片山英男訳、岩波書店、2000年。
- キケロー『弁論家について』（『キケロー選集』第7巻に所収）大西英文訳、岩波書店、1999年。
- キケロー『トゥスクルム荘対談集』（『キケロー選集』第12巻に所収）木村健治・岩谷智訳、岩波書店、2002年。
- 小池和子「キケロー『ブルートゥス』試訳（Ⅰ）：§1～§24」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第51号（2020）、pp.217-231 = 試訳（Ⅰ）
- 小池和子「キケロー『ブルートゥス』試訳（Ⅱ）：§25～§38」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第52号（2021）、pp.141-152 = 試訳（Ⅱ）
- 小池和子「キケロー『ブルートゥス』試訳（Ⅲ）：§39～§60」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第53号（2022）、pp.165-180 = 試訳（Ⅲ）
- マイヤー、エルンスト『ローマ人の国家と国家思想』鈴木一州訳、岩波書店、1978年。